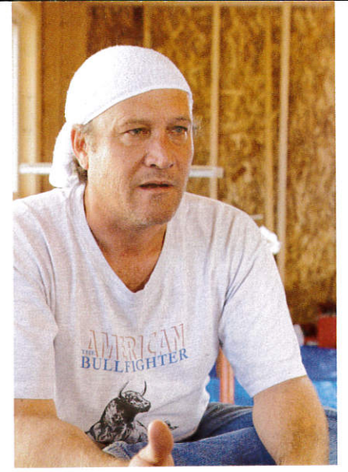
岩手・宮城・福島の旅 ガイドマップ

春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、そして冬に雪景色。四季折々の風景が楽しめる観光名所が随所にある。

震災からの復興を支え、地域住民の希望をつなぐ



山口スティーブさん

1960年米カンザス州生まれ、オクラホマ州立大学卒業後、スタンフォード大学院へ。東京大学大学院に留学。87年三菱商事入社。結婚を機に日本国籍取得。義父の他界後、山口建設社長を経て、トラベル東北を設立。日本ソフト・パワー研究所も立ち上げた。

●トラベル東北・被災地応援ボランティアツアー1万9800円 ☎0233・43・9077 www.traveltohoku.co.jp/

気仙沼市に、妻の親類が住む。10日ほど消息が分からず、叔父の生存が確認できた時点から、親戚筋への物資の輸送を開始する。

「水以外、何もない状態。事務所がある山形県最上町から、ピストン輸送の開始です」（山口さん）

津波で、ごっそり住居が流された月浜

車が使えることから、友人・知人から数々の依頼が舞い込む。透析患者の移送、下痢・嘔吐が蔓延する避難所への大量の飲み水の輸送。さらに、最上町長からは、被災民を最上町の温泉に招きたいと。

「バスの手配や部屋割りなどは、お手のもの。500名ほど招くことができました」（山口さん）

この間、幾度となく被災地の現状を目の当たりにし、胸を痛める。特に、支援の手が届いていない牡鹿半島や奥松島の惨状には、いてもたってもいられず、自らボランティアツアーを企画する。

「6月末に、ここ奥松島の月浜に来て意を決しました。風光明媚だった浜の風景は一変。多くの民宿は流され、ノリの養殖など海とともに生きてきた住民が意気消沈していました」（山口さん）

左・コミュニティーの場として集会所を造る　右・イカダ造りを手伝うボランティア

7月から毎週末に全国からボランティアを募り、多い日で35名、少ない日でも15名が復興を支援。これまでに延べ700名近くがボランティアツアーに参加している。

山口さんは建設会社に勤めただけに瓦礫の撤去や仮設住宅の建築は手慣れたものだ。常に率先して動き、夜は夜で地域住民と語らう。

そこから見えてきたものは――。

「瓦礫の撤去や清掃活動は、確かに大事。でも、復興支援はそれだけではありません。地域住民が、どうすれば生活の糧を得られるのか。そこまでケアしないと住みなれた土地を離れざるを得なくなってしまう。ここ月浜では、ノリの養殖に使うイカダを漁師の指導のもと、500台ほど造りました。将来への希望を持つことで、地域の人々は元気を取り戻していくのです」（山口さん）

愛車を駆って、被災地に数々の物資を届けた